The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	接続詞「でも」「それでも」「ところが」「それどころか」をめぐって
Author(s)	赤羽根, 義章
Citation	詞林. 1992, 12, p. 54-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67327
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

接続詞「でも」「それでも」「ところが」「それどころか」をめぐって

赤羽根　義章

1　はじめに

接続詞の職能は、「先行する文（語、句、節、段落）とあとに続く文（語、句、節、段落）との関係を示す」といえるが、前文と後文の関係を判断するのは話し手であり、その判断が接続詞によって示されるのである。つまり、接続詞は、前文と後文を単につなぐだけではなく、話し手が前文の事態と後文の事態との関わりをいかに捉らえるのかということも表している。

そこで、本稿では、従来の意味分類では逆接とされる「でも」「それでも」「ところが」「それどころか」といった接続詞に関して、どのような場合に用いられ、どのような場合に用いられないのかを考察しながら、話し手の捉え方について、判断の前提基準（意味的側面）と前文・後文の文末形式（統語的側面）から考える。また、前の文を受ける部分（「それ」）を持った「それでも」「それどころか」と前の文を受けるものがない「でも」「ところが」の差異についても考察の対象とする。

2　平叙文

2．1　肯定と否定

前文と後文が、それぞれ客観的事態として表される平叙文を考えると、文末形式は肯定と否定との次のような組み合わせの場合が考えられる。

（1）　雨が降った。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／それどころか｝給水制限が解除された。

（2）　雨が降った。｛でも／それでも／ところが／＊それどころか｝給水制限が解除されなかった。

（3）　雨が降らなかった。｛でも／それでも／ところが／＊それどころか｝給水制限が解除された。

（4）　雨が降らなかった。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか｝給水制限が解除されなかった。

（1）～（4）の例文から、先ず観察されることは、前文と後文がそれぞれ、肯定

と否定(2)、または否定と肯定(3)といった反対の関係の場合に、「でも」「それでも」「ところが」を用いることができるということである。しかし、肯定と否定といった文末形式の単なる逆接関係と考えてよいのであろうか。

(1)' 雨が少しだけ降った。{でも／それでも／ところが／それどころか} 給水制限が解除された。

(2)' 雨が少しだけ降った。{？でも／？それでも／？ところが／＊それどころか} 給水制限が解除されなかった。

(1)' は(1)と同様に、前文と後文がともに肯定文でありながら適格へと変じている。(2)' は(2)と同様に、前文が肯定文で後文が否定文であるが、逆に適格性が減じている。これらのことを考えるために、(1)' と(2)' の前文に付け加えられた副詞句「少しだけ」に注目すると、「雨が少しだけ降った」は肯定文ではあるが、実質的な雨量の面では、「雨が降らなかった」という否定文と近似した内容を表していることがわかる。それでは、「でも」「それでも」「ところが」は、否定文もしくは内容的に否定文に近い前文と肯定の後文とを結びつけ（例文(3)及び(1)' ）、後文が否定文の場合には前文と同質となるために結び付けない（例文(4)）のであろうか。そこで、(5)(6)を検討するが、その前に、「それどころか」は「雨が（少しだけ）降り、さらに給水制限までもが解除される」というように、考えるべくもなかった事態までもが起ったという累加的用法であり、「でも」「それでも」「ところが」と一線を画す必要があることを述べておく。ただし、詳しくは後述することにする。

(5) その日は朝から晴れなかった。{＊でも／＊それでも／＊ところが} 私は外出しなかった。

(6) その日は朝から雨は降らなかった。{でも／それでも／ところが} 私は外出しなかった。

(5)(6)ともに前文と後文の文末形式はどちらも否定文であるが、(5)は不適格となり、(6)は適格となる。(5)の前文は、内容的には「雨」や「曇り」などの晴れ以外のさまざまな気象状態を表し、(6)の前文は「晴れ」や「曇り」などの雨以外のさまざまな気象状態を表す。つまり、(5)と(6)の前文はともに文末形式が否定文でありながら、「雨」と「晴れ」といった正反対の事態をも意味することになる。ここで問題となるのは、何故「でも」「それでも」「ところが」が前文の「雨が降らなかった」と後文の「私は外出しなかった」を結びつけ、前文が「晴れなかった」の場合には結びつかないのかと言うことである。

2．2　前提基準と主観性

この問題を考えるには、さらに、語用論的に次のような条件場面を考えることが有効である。

（5)'〈晴れなかった場合には、屋根のペンキを塗れないので外出する予定だった〉（ところ）その日は朝から晴れなかった。｛でも／それでも／ところが｝私は外出しなかった。

（6)'〈雨が降らなかった場合、屋根のペンキを塗るので外出しない予定だった〉（ところ）その日は朝から雨は降らなかった｛＊でも／＊それでも／＊ところが｝私は外出しなかった。

（5)'（6)'は（5)（6)と前文・後文ともに同一でありながら、「でも」「それでも」「ところが」の適格と不適格が逆転してしまうのである。このことは、「でも」「それでも」「ところが」は、前文の「雨が降らなかった」と後文の「私は外出しなかった」とを結びつけるが、前文が「晴れなかった」となる場合には結びつけないのではといった単なる前文後文の文末形式から考える先の疑問を否定することになる。むしろ、（5)'（6)'において、それぞれに〈　〉に示した条件場面を設定したように、（5)（6)についても、「でも」「それでも」「ところが」が不適格や適格となる条件を考えてみる必要があろう。（5)は、〈晴れなかった場合外出しないようにしよう〉という前提基準が、（6)は〈雨が降らなかったら外出しよう〉という前提基準が、それぞれに話し手にあった場合、（5)は不適格で（6)は適格となる。

以上のことから、「でも」「それでも」「ところが」は、前文の事態から話し手が想起する前提基準に反する後文の事態を、前文の事態と結びつける接続詞と言える。この話し手自身の前提基準をもとに用いられる点で、「でも」「それでも」「ところが」には話し手の主観性が伺える。これに対して、例文(2)(3)の場合には、話し手だけのものではなく、一般的に了解される前提基準が考えられ、客観性が強まる（注1）。

（2）〈雨が降る→給水制限が解除される〉（一般的な共通知識としての前提）
（3）〈雨が降らない→給水制限が解除されない〉（　　〃　　）

同様に、前文と後文がともに肯定文である（7)a～（8)cの例文についても、その適、不適は話し手の前提基準がどのようなものであるのか（〈　〉に示す）によって決定される。

（7)a　〈雨が降ったら外出しないつもりだった（個別的）〉雨が降った。｛でも／それでも／ところが｝私は外出した。

b　〈雨が降ったら外出しないものだ（一般的）〉雨が降った。｛でも／それでも／ところが｝彼は外出した。

c　〈雨が降ったら外出するつもりだった（個別的）〉雨が降った。｛＊でも／＊それでも／＊ところが｝私は外出した。

(8)a　〈晴れたら外出するつもりだった（個別的）〉晴れた。｛＊でも／＊それでも／＊ところが｝私は外出した。

b　〈晴れたら外出するものだ（一般的）〉晴れた。｛＊でも／＊それでも／＊ところが｝彼は外出した。

c　〈晴れたら外出しないつもりだった（個別的）〉晴れた。｛でも／それでも／ところが｝私は外出した。

以上から、「でも」「それでも」「ところが」については、前文と後文とを単に肯定と否定といった文末形式から逆接的につなぐのではなく、「前文の事態内容から想起されるある事態内容を話し手が前提として持ち、この前提基準に反する事態が後文に表される時、その後文の事態を前提の基準に反するものとして話し手が捉えたことを表すものである。そして、その前提基準が非一般的であり、話し手の個別性が強ければ強いだけ話し手の主観性が強まり、逆に一般性や共通知識としての度合いが高まれば高まるだけ客観性が高まる」と想定される。

2．3　「それどころか」

次に、「でも」「それでも」「ところが」と一線を画した「それどころか」の用法を再考するために、以下の例文を考える。

(9)　貯水量を危ぶむ声が上がった。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／それどころか｝給水制限が出された。

(10)　給水制限が出されなかった。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／それどころか｝貯水量を危ぶむ声も上がらなかった。

(11)　彼女は彼に腹を立てた。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／それどころか｝彼女は彼からの電話に出なかった。

(12)　彼女は彼をなぐさめようとはしなかった。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／それどころか｝彼女は彼の責任を責めた。

(9)は前文、後文ともに肯定文、(10)は前文、後文ともに否定文、(11)は前文が肯定文で後文が否定文、(12)は前文が否定文で後文が肯定文である。いずれの場合も、「でも」「それでも」「ところが」が不適格で、「それどころか」だけが適格と判断される。このことから「それどころか」についても、単に前文と後

文の肯定、否定の文末形式の逆接関係を考えるのではなく、前文と後文の事態内容を考え、それを話し手がどのような関係として捉えようとしているのかを考察すべきと思われる。先ず、(9)の場合は、前文の「貯水量を危ぶむ声が上がった」は、人々の心配という段階を表しているのに対し、後文の「給水制限が出された」は心配という段階にとどまらず、実際に貯水量が危機的状況に陥り、その対策が講じられたことを表す内容である。(10)は、前文で貯水量が危機的状況に陥り、その対策が講じられる程のレベルとはなっていないことを表し、後文では給水制限はもとより貯水量に関して世間は全く心配をしていないといった内容を表している。この内容事態をそれぞれの前文と後文で比較してみると、(9)の場合には、貯水量に対する心配の深刻さという度合いから考えると、前文よりも後文の方が程度性が高い。(10)の場合には、前文の方が深刻さの度合いが高いといえるが、事態の出現性という点では逆に、深刻さの度合いが高い前文の事態よりも深刻さの程度性が低い後文の事態の方が出現しやすいといえる。そして、否定形が用いられることで、この出現性という程度性が取り出されるといえる。すなわち、「それどころか」は、後文の事態が前文の事態よりも程度性が高いものとして話し手が捉えたものといえる。

同様にして、(11)(12)を考えてみると、(11)の場合は、前文と後文は肯定や否定にかかわらずそれぞれに彼女の彼に対する態度を表しており、彼に対する対応の厳しさという程度性からみれば、後文の事態の方がその程度性が高いといえる。(12)も前文、後文ともに彼女の彼に対する態度を表しているが、やはり、後文の事態の方が、厳しさという程度性が高い。

つまり、「それどころか」は、語構成からは、「それ」によって前文の事態を受け、その上で「ところが」によって、前文の事態とは異なる事態を後文に展開すると考えられるが、以上で見たように、前文と後文の単純な逆接ではなく、「後文の事態内容が前文の事態内容よりも比較すべき程度性において上回っていると判断する話し手の捉え方が表される」といえる。

ちなみに、「でも」「それでも」「ところが」は、前文の事態内容から想起する以下のような話し手の前提基準と後文の事態内容とが一致するために不適格となると考えられる。

(9) 〈貯水量を危ぶむ声が上がる程の状況→給水制限が出される状況になるだろう〉

(10) 〈給水制限が出されなかった→貯水量を危ぶむ状況ではなかろう〉

(11) 〈彼女は彼に腹を立てた→彼女は彼からの電話に出なくなるだろう〉

(12) 〈彼女は彼をなぐさめようとしなかった→彼女は彼の責任を責めるだろう〉

3. さまざまな文のモダリティ

平叙文の場合には、話し手が踏まえる前提基準が個別的なものか、一般的なものかによって主観性が強まったり客観性が強まったりした。では、話し手の主観性が表される文タイプのモダリティにおいて、前提基準と話し手の主観性とはどのような関わりとなるのであろうか。

3.1 命令・禁止・勧誘

命令と禁止・勧誘は、話し手が相手に対して働きかけるという共通のモダリティを持つ。このようなモダリティ形式と接続詞との共起については北野浩章氏の論考があり、氏は「しかし」と「ところが」を取り上げ、「しかし」は命令・禁止・勧誘のモダリティを持つ後文と適応するが、「ところが」は不適格であると述べている。その理由として、北野氏は、「しかし」は話者関与性が高く、「ところが」は低いという差異をあげている。話者関与性とは、氏のことばによれば、「話者が命題を構成するための情報をどのようにして手に入れたかということに関する概念である。(中略)別の言い方をすれば、命題に含まれる情報に対する責任を話者がどの程度負っているかを示すものである」とされる(注2)。北野氏の論考は「しかし」と「ところが」の差異を峻別した点で評価され、本稿で取り上げる「でも」が「しかし」と同様に話者関与性が高いことが、以下の例文の(13)(14)から確認される。ただ、本稿は、「でも」や「それでも」が不適格となるような場合をも考慮し、「でも」や「それでも」を用いた場合の話し手の捉え方を探ろうとするものである。

(13) 試験まであと一日しかない。{でも/それでも/*ところが/*それどころか} 全力を尽しなさい。

(14) 試験まであと一日しかない。{でも/それでも/*ところが/*それどころか} あきらめるな。

(15) あきらめるな。{*でも/*それでも/*ところが/それどころか} 全力を尽しなさい。

(16) 全力を尽しなさい。{*でも/*それでも/*ところが/*それどころか} あきらめるな。

(17) 途中で逃げ出すな。{*でも/*それでも/*ところが/*それどころ

か｝あきらめるな。

(18)　頑張りなさい。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか｝全力を尽しなさい。

例文(13)(14)の「でも」「それでも」については、前節で述べたように、前文の平叙された事態内容から想起された前提基準を話し手が踏まえ、後文でその前提基準とは反対の事態の実現を相手に対して話し手が要求したものとして理解できる。この場合の前提基準は、〈試験まで一日しかない→試験をあきらめる（だろう／ものだ）〉といった一般にも了解されるものではあるが、あくまでも話し手個人のものであり、禁止はその前提基準を直接的に相手に示しながら試験をあきらめるという事態の実現を回避させようとするものであって(14)、命令は前提基準を直接示すのではなくて、試験をあきらめるという事態の実現を回避させるための方策を前向きに呼びかけたもの(13)、として捉えられる。「ところが」については、北野氏が指摘するように、命令や禁止のモダリティとの共起はない。

一方、(15)～(18)の例文は、前文と後文のいずれにも、命令なり禁止のモダリティが認められる場合であるが、この場合には「ところが」のみならず「でも」と「それでも」も不適格となる。なぜなら、これらの接続詞は、後文を前文から想起される前提基準に反するものとして前文と結ぶものであるのに、前文が命令や禁止といった話し手のモダリティの直接的な表出文となっており、前提基準をとりだすことができないからである。

ただし、以下の例文では、「でも」が適格となり、「それでも」が不適格となるような差異が認められる。

(19)　あきらめるな。｛でも／＊それでも｝無理するな。

(20)　全力を尽しなさい。｛でも／＊それでも｝無理をするな。

この場合、「でも」は前提基準を踏まえることなく、後文を転換した形（前文－激励vs後文－注意）で前文に連続（非連続の連続に近い）させている。それに対し、「それでも」は、前文を受ける「それ」があるために、あくまでも前文の事態を取り入れた上で、逆接的に後文を続ける接続詞であり、前文が相手に対する働きかけのモダリティ文となっている(19)(20)の場合には、「それでも」は前文の事態内容を話し手自身の中に取り入れることができないのである。

他方、「それどころか」は、「それでも」と同じように、前文を受ける「それ」を有してはいるが、例文(15)の場合には認められる。このことも前節に述べたが、「それどころか」は前文と後文との直接的な比較ではなく、前文と後文の事態から取り出されるある程度性においての比較であるという点から説明される。つま

り、(15)の前文「あきらめるな」と後文「全力を尽しなさい」は、後文の方が相手に対して積極的な行動を求めており、相手に求める要求度において程度性が高い。それゆえ、前文の「あきらめるな」にさらにつけ加えた形で「全力を尽しなさい」と述べることができるといえる。逆に、前文の方が後文よりも行動の積極性が強く、話し手が相手に求める要求度が高い場合(16)や、前文と後文の程度性の強弱が判別し難い場合(17)(18)、前文と後文では、相手に求めるものが正反対で、比較すべき程度性が考えられない場合(19)(20)には、不適格となる。

次に、勧誘の場合を考える。

(21) 手術後の経過は良好だ。{＊でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか} お見舞いに出かけましょうよ。

(22) 手術後の経過は不安定だ。{でも／それでも／＊ところが／＊それどころか} お見舞いに出かけましょうよ。

(23) 監督は優勝をあきらめている。{でも／それでも／＊ところが／＊それどころか} 私たちは優勝をめざしましょうよ。

(24) 監督は入賞をめざしている。{でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか} 私たちは優勝をめざしましょうよ。

(25) 大会に参加しましょうよ。{でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか} 優勝は考えないようにしましょうよ。

(26) 入賞をめざしましょうよ。{＊でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか} 優勝をめざしましょうよ。

以上の例文から、「ところが」はやはり勧誘のモダリティとは共起しないことが確認される一方、「でも」や「それでも」は単純に勧誘のモダリティと共起する、しないと断じられないことがわかる。(21)(22)の「でも」「それでも」を考える場合は、やはり話し手が前文の事態から想起する前提基準を考えることで説明される。つまり、〈手術後の経過が良好→お見舞いに出かける〉や〈手術後の経過が不安定→お見舞いに出かけない〉といった前提基準を話し手が踏まえるため、その前提基準に後文の事態が反する(22)が適格となり、反しない(21)が不適格となるのである。

では、(23)～(25)例の「でも」と「それでも」の差異は何故あるのであろうか。先ず、(23)の場合には、前文の事態から話し手が〈監督が優勝をあきらめている→（選手の）私たちも優勝をあきらめる〉といった前提基準を踏まえていると考えることで、「でも」と「それでも」が適格となることが説明される。ところが、(24)では前文の事態から〈監督が入賞をめざしている→（選手の）私たちも入賞

をめざす）といった前提が一般的に考えられ、後文の「私たちは優勝をめざす」は、その前提基準に正反するものではなく、むしろ同一方向線上に程度性の差異を持ったものとして位置づけられる。別の見方をすれば、「それでも」が勧誘のモダリティを示す後文を前文に結びつける時、「それでも」は、前文の事態を受け、前文の事態が後文の相手に対して誘いかける事態の実現にとって障害として存在しても、その障害を乗り越えて後文の事態内容を実現しようと話し手が相手に働きかけることを示すといえる。(23)例の場合、前文の「監督は優勝をあきらめている」という事態は、優勝をめざす（選手の）私たちにとっては、優勝実現の障害となるのである。ところが(24)例では、前文の「監督は入賞をめざしている」という事態は、優勝をめざす（選手の）私たちにとって乗り越えるべき障害とまではなっていない。この差異が、適格、不適格の差となったと考えられる。その点、「でも」は前の事態を直接受け入れないため、前文の事態内容（監督側の事態）から転換して後文の事態内容（選手である私たち側の事態）と結ぶ転換用法と考えられる。(26)例は、前文後文ともにレベルが近似する上に（選手である）私たち側の事態であるために転換ができず、不適格となるのであろう。ただし、(25)例の場合には、前文後文ともに話し手の相手に対する誘いかけではあるが、前文と後文の内容的な差異が大きく存在し、「でも」は転換用法として適格となるのであろう。

「それどころか」については、先ず(25)例の場合には、前文の内容と後文の内容が程度性において比較すべきものでないために不適格となっている。(26)例では、前文の入賞と後文の優勝という同一方向線上の程度差が認められはするが、前文、後文ともに話し手の相手への誘いかけであるため、程度差のある誘いかけを連続して行うことは、話し手の要求がどこにあるのかがあいまいとなり不適格となる。しかしながら、(26)の前文が相手の発話であって、「それどころか」以下の後文が話し手自身の返事の場合には適格となろう。

(26)'　入賞をめざしましょうよ（相手）。（いや）それどころか優勝をめざしましょうよ（話し手）。

つまり、前文が勧誘のモダリティ文ではあっても相手側のものであるため、話し手は「それ」によって話し手の外側にある相手の勧誘の内容（入賞をめざす）を客観的に受け止め、相手の方よりも程度性において勝っている事態（優勝をめざす）を相手に対して誘いかけることができるのである。

3．2　疑問

次に、3．1と同様に、話し手の相手に対するモダリティを表す疑問（問いかけ）について考察する。

(27)　雨が激しく降っています。｛でも／それでも／＊ところが／＊それどころか｝出かけるのですか？

(28)　雨が激しく降っています。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか｝出かけないのですか？

「でも」「それでも」が(27)では適格、(28)では不適格となることは、3．1のように話し手の踏まえる前提基準を考えることで説明できる。話し手は前文の「雨が激しく降っている」という事態から〈外出しないだろう〉という前提基準を想起した上で、その前提基準に反する事態を起こそうとしているのか否かを相手に対して問いかけるために適格と不適格の差異が現れたといえよう。ただし、相手が災害パトロール員のような場合には〈雨が激しく降ると→災害パトロールに員はパトロールに出かける〉といった個別事態を考えなければならず、この場合は逆に、「でも」「それでは」は(27)が不適格で、(28)が適格となる。もっとも、いずれの場合も、疑問として相手に問いかける以上、その質問が相手にとって充分理解できるものでならなくてはならない。理解されるためには、なぜ問いかけるのかという根拠が相手にも了解される必要があり、この場合の根拠は前提基準である。このように考えると、〈雨が激しく降っている→出かけない〉は話し手の前提基準ではあるが、それは少なくても問いかける相手に共有されることになる。この点で、一方的に相手に要求する命令・禁止とは異なる。命令・禁止の場合は、前提基準はあくまでも話し手個人のものであればよく、要求する相手に了解される必要ない。そして、勧誘は、相手に対する要求の一種ではあっても、同意を求める点で、前提基準が誘いかける相手にもある程度了解される必要があろう。

(29)　彼女は彼の電話には二度と出ません。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／それどころか｝彼女は彼と別れるのでしょうか？

(29)例では、前文の事態内容から想起されることは、〈彼女は彼の電話に二度と出ない→彼女は彼との関係を絶つ〉といったことであり、これを前提基準とする「でも」「それでも」は、後文がこの前提基準そのものを相手に対して表出してしまっているために、後文をこの前提基準に反するものとして捉えることができず不適格となる。他方、「それどころか」の場合には、前文の事態に比べ後文の事態の方が、彼女が彼に対してとる態度の厳しさという度合い、または二人にとっての事態の深刻さといった度合いにおいて程度性が高いため、前文を受けた

上で、前文の事態よりも比較されるべき程度性が高い後文の事態を結びつけることができるのである。

(30) 彼女は彼をとても愛しています。{？でも／それでも／＊ところが／＊それどころか} 彼女は彼と別れるのでしょうか？

(31) 彼女は彼をとても愛しています。{＊でも／それでも／ところが／＊それどころか} 何故彼女は彼と別れるのでしょうか？

(30)と(31)との相違は、後文における「何故」の有無である。(30)(31)はいずれも前文は同じため、話し手が前提基準として踏まえることは〈彼女は彼をとても愛している→彼女は彼と別れることはないだろう〉といったものとなる。ところが、例文(30)の後文は、前提基準に反する「彼女は彼と別れる」という事態の実現があるか否かの相手への問いかけであり、例文(27)(28)の場合とは異なって、問いかけられた相手も自分のことではない以上、そのことは確定されない。そのために、後文の事態を前提基準に反するものとして捉えることができず、「でも」の違和感が強くなる。他方、「それでも」が適格とされるのは、前文の事態を「それ」で受け、その前文に表されている事態が後文の「彼女が彼と別れる」という事態の実現にとっていかに障害となるものであるか、すなわち後文の事態は前文の事態から考えて実現されるのであろうかといった疑念を後文にそのまま表出する用法のためである。つまり、「それでも」は、〈彼女は彼と別れることはないだろう〉という前提基準の裏返しの表現（「果して、彼女が彼と別れるということがあるのでしょうか？まず考えられないことです」ぐらいの）として、後文を前文に結びつけているために、矛盾することなく、適格となる。

ところで、(31)例の後文では「彼女が彼と別れる」という事態は、(30)例のような予想の事態にはとどまらない。「彼女が彼と別れる」という事態は確定しており、「彼女が彼と別れる」ことの理由が問題とされている。「それでも」は、先述したように、前文の「彼女は彼をとても愛している」という事態を受け、この事態が後文の「彼女は彼と別れる」という事態実現にとって大きな障害であることを、つまり、後文の事態は前文の事態から考えて実現されうると思えないのに、実現してしまうのは何故かといった疑念を後文にそのまま表出した用法となっている。「でも」については、後文が疑問文ではなく、平叙文であるならば、前文から想起される前提基準に反する事態が確定したものとなり、適格となる。しかし、(31)の後文では「彼女が彼と別れる」という事態そのものが述べられるのではなく、「彼女が彼と別れる」という事態の原因を問題化している点で、先の前提基準に反する形とはなっておらず、不適格となる。

さて、ここで注目すべきことは「ところが」である。今まで考察し、また北野氏も指摘するように、命令・禁止・勧誘そして疑問などの対人に対するモダリティが表される文においては、「ところが」は不適格となるが、(31)例の場合には適格と考えられるのである。このことは、やはり(30)と(31)の後文の違いから説明される。2節の平叙文で述べたように、「ところが」は前文と後文という確定した事態同士の関係を話し手が前提基準を踏まえた上で捉えるものであるため、後文で事態確定そのものを問いかけている(30)例では不適格となる。しかし、「彼女が彼と別れる」という事態は確定したもので、その理由を問いかけている(31)例の場合には、

(31) 彼女は彼をとても愛しています。ところが、彼女は彼と別れますが、何故でしょうか？

のように、前文の事態と後文の事態との断絶を強く表し、その上で、その理由を問いかけていると解釈されよう。

最後に、前文後文ともに疑問のモダリティの場合を考える。

(32) 雨が激しく降っているのでしょうか？｛？でも／？それでも／＊ところが／＊それどころか｝出かけるのでしょうか？

(32)' 雨が激しく降っているのでしょうか、いないのでしょうか？｛＊でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか｝出かけるのでしょうか？

(33) 私は彼の電話に出てはならないのでしょうか？｛＊でも／＊それでも／＊ところが／それどころか｝私は彼と別れなくてはならないのでしょうか？

前文が疑問文の場合、事態が確定していないため、話し手は前文から想起される前提基準を持つことができず、基本的には「でも」「それでも」「ところが」は不適格となる。ただし、(32)例の「でも」「それでも」を不適格と断定しなかったのは、前文が「雨が激しく降っているのでしょうか？」という疑問文ではあっても、それが単なる事態に対する問いかけというよりも、不安や心配なども含んでいる時に、その不安や心配の対象となっている「雨が激しく降っている」という事態を仮想して後文を続けた場合には適格性が生じるためである。

(32) 雨が激しく降っているのでしょうか？（雨が激しく降っている場合は普通出かけないものですが）｛でも／それでも｝出かけるのでしょうか？

つまり、「でも」「それでも」の「ども」が担う逆接仮定が色濃く出た場合といえる。しかし、(32)' のように不安や心配が全く表されない単なる「雨が降っているのか、いないのか」といった事態の成否そのものの問いかけの場合には、この逆接仮定の用法をとることができず、先に述べた理由から不適格となる。

(33)例の「それどころか」が唯一適格とされるのは、「それどころか」は「それ」によって前文から「私は彼の電話に出てはならない」という事態を取り出して受け入れ、その事態と「私は彼と別れる」という厳しさにおいてより程度性の高い事態とを比較しているからである。

命令・禁止・勧誘は相手にある事態の実現を望む以上、話し手は相手に対してどのような事態実現を望んでいるのかを明確にしなくてはならない。ところが、前文で命令・禁止・勧誘のモダリティを表し、さらに「それどころか」で結ばれる後文を同じく命令・禁止・勧誘といったモダリティの文にしてしまったのでは、話し手の相手に対する要求がいずれにあるのかが不明瞭なものとなってしまうのである。その点、疑問のモダリティの場合には、前文の疑問文よりもさらに程度性の高い事態を後文で相手に問いかけることによって、話し手は不安や心配を次々と程度性の高い順へと述べたてる相手への念押し的な用法となっているのである。

3．3　意志・希望

話し手が相手に対して表出するモダリティとして、最後に意志や希望を考えることにする。

(34)　雨が激しく降っている。｛でも／それでも／＊ところが／＊それどころか｝私は出かけ（るつもりだ／たい）。

(35)　私はコーヒーを飲（むつもりだ／みたい）。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか｝私はアイスを食べ（るつもりだ／たい）。

(35)'　私はコーヒーを飲（むつもりだ／みたい）｛でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか｝私はアイスも食べ（るつもりだ／たい）。

(34)例のように、前文の事態から前提基準を想起できるものは、その前提基準〈普通は雨が激しく降っていると出かけない〉と反する事態の実現を意志や希望の形で表したと考えられ、「でも」や「それでも」は意志や希望のモダリティと共起することになる。一方、(35)(35)' では前文が話し手自身の意志や希望のモダリティ文となっており、後文においてさらに意志や希望を表すことは自己矛盾を引き起すことになり、不適格となる。しかし、(35)' のように、後文に副助詞「も」を用いることで、「でも」の適格性が生じる。この場合の「でも」は、前文と後文とを引き離し、転換させる用法とみることができる。その点、「それでも」は「それ」が前文を受け入れてしまうために、前文と後文のモダリティ同士の矛盾が生じ、不適格となる。

それでは、前文が彼という他者のモダリティで、後文が話し手自身のモダリティを表している場合はどうであろうか（注３）。

(36)　彼はコーヒーを飲むつもりだ。｛でも／それでも／＊ところが／＊それどころか｝私はアイスを食べるつもりだ。

(36)'　彼はコーヒーを飲むつもりだった。｛でも／それでも／ところが／＊それどころか｝私はアイスを食べるつもりだった。

(36)"　彼はコーヒーを飲むつもりだった。｛でも／＊それでも／ところが／それどころか｝私はアイスも食べるつもりだった。

(37)　彼はコーヒーを飲みたがっている。｛でも／それでも／＊ところが／＊それどころか｝私はアイスを食べたい。

(37)'　彼はコーヒーを飲みたがっていた。｛でも／それでも／ところが／＊それどころか｝私はアイスを食べたかった。

(37)"　彼はコーヒーを飲みたがっていた。｛でも／＊それでも／ところが／それどころか｝私はアイスも食べたかった。

「でも」と「それでも」は、前文が他者の意志や希望であるため、それに反する話し手自身の意志や希望を後文に表出しても矛盾することがなく適格となる。ただし、「それでも」は前文を「それ」で受け、その前文の事態を乗り越えた後文の事態実現を表すため、(36)"(37)"のように後文に「も」が置かれ、アイスのほかに前文と同じコーヒーが暗示されるような場合には、前文と後文の事態の対立が弱まり不適格性が強まる。

(36)'(37)'　　彼はコーヒーを飲　（むつもりだった／みたがっていた）
　　↕　　↕
　　私はアイス　を食べ（るつもりだった／たかった）

VS

(36)"(37)"　　彼はコーヒーを飲　（むつもりだった／みたがっていた）
　　↕　　↕　　‖
　　私はアイス　も食べ、コーヒーも飲（むつもりだった／みたがっていた）

その点では逆に、後文に前文の事態（コーヒー）を受け入れた上で、さらにほかのもの（アイス）が累加されたことを表す「それどころか」は、(36)"(37)"では適格性が強まる。

「ところが」については、適格となる(36)'(36)"(37)'(37)"の後文の時制が過去であり、話し手自身の意志や希望とはいっても、客観化された事態として

表されており、そのことが適格性を生じさせると考えられる。

4．　認識・判断のモダリティ

本節では、対人のムードではなく、命題に関わる話し手の認識や判断のモダリティを表す文末形式を考えることにする。もっとも、このことは、北野氏が仁田(1989)の判断のモダリティと森山(1989)の認識のムードを参考にして、「しかし」と「ところが」について論究し、「しかし」は「ダロウ、マイ、カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ、ヨウダ、ミタイダ、ラシイ、ソウダ」のいずれとも適格となるのに対し、「ところが」は「ソウダ、ラシイ」は適格であるが、「ヨウダ、ミタイダ、ラシイ」とは違和感が強く「ダロウ、マイ、カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ」とは不適格となると一般化して論じている（注４）。氏の論考は、「しかし」と「ところが」の差異を大筋において把握している点で首肯される。ただ、前節までにもみたように、「でも」「それでも」「ところが」「それどころか」が用いられる場合と用いられない場合とを語用論的に考察しながら、これらの接続詞が前文と後文のかかわり方をどのように捉えようとするのかを考えたい。

4．1

先ず、話し手の推量を表す「だろう」と打ち消し推量を表す「まい」について、以下の例文を考察する。

(38)　雨が激しく降った。｛でも／それでも／＊ところが／＊それどころか｝給水制限は続くだろう。

(38)'　雨が激しく降った。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか｝給水制限は続くまい。

(39)　雨が降らなかった。｛＊でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか｝給水制限は続くだろう。

(39)'　雨が降らなかった。｛でも／それでも／＊ところが／＊それどころか給水制限は続くまい。

以上の例文から、「ところが」はやはり話し手の推量のモダリティと共起しないと言えよう。「でも」「それでも」については、単にモダリティとの適不適ではなく、前文の事態との関わりが問題である。このことは、今までにくり返し述べたが、〈雨が激しく降る→給水制限が解除される〉や〈雨が降らない→給水制限が解除されない〉といった前提基準（この場合には、一般的に了解されるレベ

ルである）を踏まえ、それに反する事態を話し手が後文に推量という形をとりながら展開させており、この前提基準に反する(38)(39)' の「でも」「それでも」は適格となり、前提基準に反しない(38)' (39)は不適格となる。

「それどころか」については、以上の例文のほかに、次の例文も考える必要がある。

(40) 周囲は彼に入賞の期待をしている。{＊でも／＊それでも／＊ところが／それどころか} 彼は優勝するだろう。

(41) 周囲は彼に優勝の期待はしていない。{＊でも／＊それでも／＊ところが／それどころか} 彼は入賞さえするまい。

このことから、「それどころか」は、前文の事態よりも程度性の高い事態を話し手が推量して後文に表した場合には適格となることがわかる（注５）。

次に、前文も推量のモダリティ文となっている場合を考える。

(42) 雨が降るだろう。{でも／？それでも／＊ところが／＊それどころか} 給水制限は続くだろう。

(43) 雨は降るまい。{でも／？それでも／＊ところが／＊それどころか} 給水制限は続くまい。

(44) 周囲は彼に入賞の期待をしているだろう。{＊でも／＊それでも／＊ところが／それどころか} 彼は優勝するだろう。

(45) 周囲は彼に優勝の期待をするまい。{＊でも／＊それでも／＊ところが／それどころか} 彼は入賞さえするまい。

(42)(43)で「でも」が適格と思われるが、前文自体が話し手の推量であり、そこからは話し手自身が前提基準を想起することはできない。この場合は、前文で推量する事態内容にかかわる一般的に了解される常識を前提基準として取り上げ（〈雨が降る→給水制限が終わる〉(42)、〈雨が降らない→給水制限が続く〉(43)）、そのことに反する事態内容をも話し手が予想していることを、推量のモダリティ文として後文に表しているといえる。その点、先述したが、「それでも」は前文そのものを「それ」によってそのまま受け入れようとするものの、前文のモダリティまでは受け入れられず、不適格となっている。一方、「それどころか」が(44)(45)で適格となっているが、これは後文の事態内容（優勝・入賞しない）が前文の事態内容（入賞・優勝しない）よりもその程度性において高いということに加え、前文は周囲という第三者の彼に対する期待度に関する推量であるが、後文は話し手自身の彼に対する期待が推量表現で述べられていることが要因と思われる。つまり、推量される事態は、前文では他者（周囲）側のもの、後文では

話し手自身の側のものとなるため、推量のモダリティ文同士であっても矛盾しないといえよう。

4．2　「かもしれない・にちがいない・はずだ」

次に、事態に対する判断・認識のなかで、推し量りの確からしさを表す「かもしれない」「にちがいない」「はずだ」に関して考察すると、確からしさという程度性においては差異のあるこれらだが、同様の結果を得る。

(46)　その車は価格が高い（かもしれない／にちがいない／はずだ）。｛でも／それでも／ところが／＊それどころか｝品質はよくない（かもしれない／にちがいない／はずだ）。

(46)'　その車は価格が高い（かもしれない／にちがいない／はずだ）。｛？でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか｝品質もよくない（かもしれない／にちがいない／はずだ）。

(47)　その車は価格が高い（かもしれない／にちがいない／はずだ）。｛でも／？それでも／？ところが／＊それどころか｝品質はよい（かもしれない／にちがいない／はずだ）。

(48)　その車は価格が安い（かもしれない／にちがいない／はずだ）。｛でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか｝品質はよくない（かもしれない／にちがいない／はずだ）。

(49)　その車は価格が安い（かもしれない／にちがいない／はずだ）。｛でも／それでも／ところが／＊それどころか｝品質はよい（かもしれない／にちがいない／はずだ）。

(49)'　その車は価格が安い（かもしれない／にちがいない／はずだ）。｛？でも／＊それでも／＊ところが／それどころか｝品質もよい（かもしれない／にちがいない／はずだ）。

(46)～(49)'は、それぞれの前文の文末に「かもしれない」「にちがいない」「はずだ」といったモダリティ形式をつけ加えても、接続詞の適格、不適格は前文が平叙文の場合と変わらない。なぜなら、「だろう」「まい」の場合には、話し手の事態把握のあり方が表されるのに対して、「かもしれない」「にちがいない」「はずだ」は確からしさの程度差はあるものの、話し手の判断のみならず「その車は価格が高い／安い」という事態の確からしさが問われているからである。つまり、「かもしれない」「にちがいない」「はずだ」という文末モダリティ形式を備えた前文から、確からしさが問われている事態（「その車は価格が高

い／安い」）を話し手は取り出すことができるからである。例えば、(46)と(49)については、それぞれに〈価格が高い→品質がよい〉(46)、〈価格が安い→品質がよくない〉(49)といった一般的に了解される前提基準を考えることで、「でも」「それでも」「ところが」が適格とされることは2節で述べた通りである（注6）。問題は、(46)'(49)'のように後文の副助詞「は」を「も」に入れかえると、「でも」は適格性が減じて、「それでも」「ところが」が不適格となり、一方で「それどころか」が適格となることである。先ず、「でも」「それでも」「ところが」は前提基準として〈価格が高い→品質がよい〉(46)'、〈価格が安い→品質がよくない〉(49)'を踏まえているが、(46)'と(49)'の後文はそれらの前提基準に反する「品質はよくない」(46)'や「品質がよい」(49)'という事態だけでなく、副助詞「も」によって、他の事態（例えば「デザインがよくない」(46)'や「デザインがよい」(49)'など）が暗示され、前提基準だけでは捉えきれない側面が現れるため、適格性が落ちると考えられる。一方、「それどころか」が(46)'(49)'において適格となるのは、前文の「その車は価格が高い」ということ自体も話し手にとってマイナス評価の事態ではあるが、その程度性において、さらにマイナス評価となる「品質がよくない」という事態を後文に累加しているためであり(46)'、また、前文が「その車は価格が安い」ということは話し手にとってプラス評価の事態であるが、その程度性においてさらにプラス評価の事態「品質がよい」を後文に累加しているためである(49)'。

ところで、(47)(48)では、前文から想起される一般的な前提基準は、それぞれに、〈価格が高い→品質がよい〉(47)、〈価格が安い→品質がよくない〉(48)となるが、(47)(48)の後文はこれらの前提基準と反しないため、「それでも」「ところが」が不適格となる。その点「でも」は適格と見れるが、この場合の「でも」は、前提基準を介す用法ではなく、前文と後文の転換を表す用法であろう。つまり、例文(47)は、前文がプラス評価の事態で、後文がマイナス評価の事態となっており、(48)は(47)の逆の配置となっているのである。このことは、例文(47)(48)ともに、「でも」によって、プラス評価とマイナス評価の二面が転換されていることを示していることになる。

「それどころか」は、前文と後文が程度性によって比較され、後文を前文よりも勝っている形で表すが、(47)(48)では前文と後文が比較されるべき同質の程度性を持っておらず、不適格となる。

4．3　「ようだ・みたいだ」

何らかの状況を踏まえた、話し手の事態への推し量りを表す「ようだ」と「みたいだ」についても、4．2と同様の結果を得る。

(50) その車は価格が高い（ようだ／みたいだ）。{でも／それでも／ところが／＊それどころか} 品質はよくない（ようだ／みたいだ）。

(50)' その車は価格が高い（ようだ／みたいだ）。{？でも／＊それでも／＊ところが／それどころか} 品質もよくない（ようだ／みたいだ）。

(51) その車は価格が高い（ようだ／みたいだ）。{でも／？それでも／？ところが／＊それどころか} 品質はよい（ようだ／みたいだ）。

(52) その車は価格が安い（ようだ／みたいだ）。{でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか} 品質はよくない（ようだ／みたいだ）。

(53) その車は価格が安い（ようだ／みたいだ）。{でも／それでも／ところが／＊それどころか} 品質はよい（ようだ／みたいだ）。

(53)' その車は価格が安い（ようだ／みたいだ）。{？でも／＊それでも／＊ところが／それどころか} 品質もよい（ようだ／みたいだ）。

例文についてのいちいちの説明は、4．2と同様であるので省略するが、このような結果を得るのは、やはり、「ようだ」「みたいだ」が何らかの状況や徴候を踏まえた事態への推し量りを表すために、前文の文末にこのようなモダリティ形式が加えられても、話し手は推し量られる事態を取り出せるためと考える。

4．4 「そうだ」・「らしい」

最後に、話し手が他者から情報を得て、判断を表す（伝聞）「そうだ」「らしい」を考えると、これも4．2、4．3と同様となる。このこともやはり、「そうだ」「らしい」が他者からの情報を得て推し量りを表すために、前文の文末にこのモダリティ形式が加えられても、話し手は推し量られる事態を取り出すことができることに依ると考えられる。

(54) その車は価格が高い（そうだ／らしい）。{でも／それでも／ところが／＊それどころか} 品質はよくない（そうだ／らしい）。

(54)' その車は価格が高い（そうだ／らしい）。{？でも／＊それでも／＊ところが／それどころか} 品質もよくない（そうだ／らしい）。

(55) その車は価格が高い（そうだ／らしい）。{でも／？それでも／？ところが／＊それどころか} 品質はよい（そうだ／らしい）。

(56) その車は価格が安い（そうだ／らしい）。{でも／＊それでも／＊ところが／＊それどころか} 品質はよくない（そうだ／らしい）。

(57)　その車は価格が安い（そうだ／らしい）。｛でも／それでも／ところが／＊それどころか｝品質はよい（そうだ／らしい）。

(57)'　その車は価格が安い（そうだ／らしい）。｛？でも／＊それでも／＊ところが／それどころか｝品質もよい（そうだ／らしい）。

5．　おわりに

本稿では「でも」「それでも」「ところが」「それどころか」が用いられる場合と用いられない場合とを考察しながら、話し手の事態の捉え方を明らかにしようとした。その際、前提基準といったものを考え、それを踏まえた用法と、それ以外の用法、また、その前提基準と前文・後文のモダリティとの関わり、さらには「でも」と「それでも」、「ところが」と「それどころか」の異同などを考察した。

確かに、語用論的考察は言語事実の多様さを気づかせてくれる。しかしながら、どうもその多様さの中に迷い込んだ感がある。また、本稿で取り上げたものと同類とされる接続詞の考察はもとより、前文と後文の可展性の問題、接続詞全体の体系的記述、さらには他の品詞（主に副詞）との相関といった問題など、今後に残された課題が多い。

注

（1）　森山氏は、参考文献10の中で、「主観的情報は、共通知識としての共有を前提としておらず、客観的情報は共通知識として共有されてこそなり得る」と述べ、話し手の主観性を表す文と客観的事実の文の相違を捉えている。

（2）　参考文献３のp.39。

（3）　「つもりだ」は、一人称と三人称の主語に用いることができるが、「たい」は一人称のみで、三人称とは共起しないため除くこととし、「～したがっている」といった客観的な様態を表す形式で考えることにした。

（4）　参考文献３のp.41～p.45。

（5）　入賞と優勝は、期待度や評価度の点で後者の方が程度性が高い。しかし、(41)のような場合には、優勝よりも入賞の方が実現性や容易度の程度が高い分、「入賞しない」ということは、「優勝しない」ということよりも、容認されない程度性が高まっているといえる。

（6）　４節の冒頭に記したが、北野氏は、「ところが」は「カモシレナイ・ニ

チガイナイ・ハズダ」の場合には不適格と断じており、このことがこの文末形式のモダリティと「ヨウダ・ミタイダ」や「ソウダ・ラシイ」のモダリティとの差異として確認されるとしている。しかし、本稿のとる立場は、「ダロウ・マイ」とそのほかの文末モダリティとの間に一線を引こうとするものである。

参考文献

1　石神照雄「接続詞について」（「信州大学教養部紀要　人文科学」14号 1980年）

2　井手至「接続詞とは何か－研究史・学説史の展望－」（『品詞別日本文法講座』6　1973年）

3　北野浩章「『しかし』と『ところが』－日本語の逆接系接続詞に関する一考察」（「言語学研究」第8号　1989年）

4　北原保雄「陳述副詞と接続詞と感動詞と―その構文論的位置づけについて―」（「文学・語学」74　1974年）

5　佐治圭三『日本語の文法の研究』（ひつじ書房　1991年）

6　佐藤恭子「接続詞の分類について」（「名古屋学院大学外国語教育紀要」16　1987年）

7　塚原鉄雄「接続詞」（「月刊文法」1の1　1968年）

8　寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』（くろしお出版　1991年）

9　ひけひろし「『それで』『だから』『したがって』」（「教育国語」88 1987年）

10　森山卓郎「文末思考動詞『思う』をめぐって－文の意味としての主観性・客観性－」（「日本語学」第11巻第9号　1992年）

（あかばね・よしあき　愛知教育大学講師）